

第 12 話<古祖母考>の要約と参考資料

第 12 話<古祖母考>の要約

豊後南部と日向北部を支配した大神一族が、素朴な山岳信仰の社の祭神に、自分たちの祖先神豊玉姫を加えていきました。姫が「神武の祖母」ゆえに社を「祖母宮」に統一、「祖母嶽」と呼ばれていた山は、名前の混同を避けるために「古祖母山」と改名させられました。

第 12 話<古祖母考>の参考資料

1 2 - 1 健男霜凝日子命（たけおしもごりひこのみこと）

清川村誌 P448 より

この地域の人々が霜を恐れ、この霜を司る神として祖母山（健男霜凝日子命）を昔から信仰していたにちがいない。現在、健男社の氏子である泉部落では今日でも、晩霜の時、霜祭りのお神酒をあげている。

加藤数功「祖母嶽を中心とした神社と祖母山祭り」（「祖母・大崩山群」所収；P127）

健男霜凝日子神という神名のことだが、太宰管内誌では「御名の義は勇猛なる男神に因て負わせるべし、霜凝は霜のいみじく結が処にて負はせたり」。この意味で風除、雨除、天気祈願の神。つまり五穀豊穰の神であったもので、この信仰が山麓六社のあるところ以外に、広大な地域に広がり、あの祖母山の巨大な山体を遥拝し、いわゆる風祭と称し、風除け、雨除けのお祭りをする行事が深く民間の年中行事にまで広げられてきたものであろう。

1 2 - 2 祖母山と古祖母山について

竹田市史上巻 P8 より

祖母山（1757メートル）は、彦五瀬命の祖母・豊玉姫を祀るところから、「祖母」の山名が生まれたと説かれている。しかし、この山が「そば」の名称で呼ばれるようになったのは、さして古いことではないらしく、古くは「うばが岳」と呼ばれて「姥岳」の字があてられていたらしい。この山の祭神「豊玉姫」を祀る社が「健男霜凝日子神社」であり、山頂に上宮、下宮が山麓にある。（略）この山と祭祀が歴史上に登場するのは、遠く平安時代の中期にまでさかのぼる。しかし、この時期の記事は、まだ断片的にすぎないが、これが鎌倉時代の『平家物語』に至って、大記事としてクローズアップされる。すなわち同書の「緒環（おだまき）之事」に見える大神氏にまつわる伝説である。

谷川健一著「青銅の神の足跡」P239より

ところで三輪山伝説はどのようにして豊後大野郡の緒方郷にもちこまれたのであろうか。姫岳は現在は緒方町に隣接する大分県竹田市の神原にある。そこには洞穴があり、穴の森神社とよばれる神をまつている。姫岳は祖母山のすぐ近くで、そこに山の神としての女神がまつられていた。祖母という名がそれを暗示している。祖母山はまさに九州の中央山地に住む者にとっては象徴的な山である。この祖母山と峯つづきの障子岩をへだてて西側には姫岳がある。この姫岳に三輪山伝説が生まれたのは、豊後大野郡の緒方町が緒方氏の本貫であり、また緒方氏が大神姓を名乗ったというだけでは充分でないものがあるとおもう。三輪山伝説の蛇はまた金属をも意味するということから、尾平鉦山への関心が潜在していると私は考える。

(*ここでいう姫岳は「祖母山」のこと、祖母山は「古祖母山」のことと思われる。谷川氏はなぜ、現在のふつうの呼び名を無視し、このように称したのか?)

佐藤春喜さんの話(聴取日不明)

古祖母山のことを「祖母山」ち言いよったとよ、昔は。ところが、背比べをして向こうの方が高かったので、向こうが新祖母、こっちが古祖母になった。こんだ、根子岳と背比べをしたら、根子岳の方が高かったと。祖母山が怒って、たたいたもんやから、根子岳の頭がギザギザになった。

土呂久水神石銘(慶応元年=1865年)

抑此用水 祖母嶽南面之麓富麓門惣見ヨリ五ヶ村門迄……

*土呂久を「祖母嶽南面」と書いていることをみれば、ここでいう「祖母嶽」は今の古祖母と考えてよかろう。明治になり、「新祖母」「古祖母」の言葉ができるまで、祖母嶽は二つあったのではないか。岩戸の者にとっての祖母嶽と豊後の者にとっての祖母嶽と。

*岩戸村絵図に土路久村の奥に「祖母嶽」と書いたものがある。

加藤数功ら編「祖母・大崩山群」P7より

古祖母山はむかし祖母山神の古い在所で、ここが祖母山峯より低いので、高い祖母山へ飛び遷ったといわれている。

12-3 姫岳伝説

川原一之著「浄土むら土呂久」P38~39より

祖母山(姫嶽)には、大蛇にまつわるこんな伝説が残っている。

姫嶽を源とする奥嶽川ぞいの宇田という村に、華本姫はなもとと呼ばれる美しい姫が住んでい

た。夜ごと、この姫のもとへ若者が通ってくる。姫が身重になったとき、母親が心配して尋ねた。

「いったい誰の子どもなのですか」

「どこのどなたか教えてくださらないのです」

母親は、相手の身元を調べる方法を娘にさずけた。若者はその夜もやってきた。楽しい時間を過ごして帰りぎわ、姫は母親に言われた通り、若者の衣の襟に針を刺した。世が明けて、姫がおだまき小手巻の糸をたどっていくと、糸はおだまき姫嶽の岩穴につづいていたのである。中から呻き苦しむ声が聞こえてくる。

「あなたを慕って、ここまで訪ねてまいりました」

「おまえの刺した針が顎に刺さって痛くてたまらぬ」

「はるばるやってまいりました。ぜひ、姿をお見せください」

願いにこたえて穴から這い込んできたのは、赤く長い舌をぐるっと巻いた世にも恐ろしい大蛇であった。

「お前の腹に宿したわたしの種は、必ずや名高い人物になる」

そう言い残し、穴に戻って息絶えた。大蛇は、おだまき姫嶽の神の化身だったのである。

姫は男の子を出産した。成長したその子はおのがだいたこれもと大神大太惟基と名乗り、大蛇の予言通り、近在に並ぶ者なき勇将となった。肥後の菊池氏から妻を迎え、高千穂太郎政次、あなみ阿南次郎惟季、わかだ植田七郎季定、大野八郎基平、臼杵九郎維盛の五男をもうけた。

ここに登場する大神氏は、11世紀から12世紀にかけて豊後国南部と日向国北部に勢力を築いた一大武士団である。惟基の五人の息子の姓、高千穂、阿南、植田、大野、臼杵は、この一族が支配した荘園の名にぴたり一致する。その支配圏にひとときわ高くそびえる霊山、それが、山麓農民の素朴な祈りを結晶した信仰の山、おだまき姫嶽であった。

その山の神の子孫たることを標榜した大蛇の伝説は、大神一族が豊後と日向境一円の統治者になったことの宣言とみてよい。

12-4 祖母岳信仰

小手川善次郎「祖母岳信仰についての私考察」（遺稿集「高千穂の民家他歴史資料」所収）からの抜粋

☆祖母岳の名称に就いては、豊後史跡考に「祖母岳は豊玉姫命を配祀す、神武天皇の皇祖母に当たらせ給ふの故を以てなりと云ふ」

☆日向国史に「高千穂の北に祖母の高峯あり、豊後に跨る、其北方の広野亦所謂高千穂の一部なるべし。北に久住山の高く聳るあり。高千穂峯の名、日本紀所引の一書に、高千穂の添ほり山とも又高千穂の穂觸峯、または穂日峯ともあり、祖母は蓋して（そほり）の古名を伝へ、久住は穂觸若しくは穂日峯の旧称を存するものにあらざるか。高千

穂の名、もと単なる山岳の称にあらず、(ホ)は山の(秀)にして、高峰の屹立せるを意味す。高千穂とは蓋し、数多の高峰の重畳せる地方の義なるべし」

☆祖母山は豊後にありては、姫が嶽と称す。

☆日向日記に「高千穂の人の説に、祖母は(そほり)の転訛なるものならんとの説ありけるより、近頃の人、これを信じかく名づけるなりと。……」

☆天保十五年二月田原正念寺寛隆著「高千穂日」に……すべて高千穂祖母の辺は尾をかさね、くまを重ねたる故、神代巻に襲の高千穂と云ふなり。

☆これによりて見る通り祖母岳に就いては種々の混同が認めらるるのである。第一は姫嶽と云ふ名で豊後にありて日向にない事である。第二は大蛇伝説は祖母岳にはない事である。(略)第三の混乱は、健男霜凝日子と姫嶽大明神の混同であり、これは祭祀の項で評説する。「そふり」に就いては三品彰英氏「建国神話考」に朝鮮語の「京」を意味する「ソプル」にもとづくると云ふ説に従ふべく、「プル」は村の義で「フル」「フレ」「ムラ」「モリ」等同根であり。又「火」を意味する「ブルク」(赫)にも通じて居る。「フリ」「フツ」も同根で「フツ」のみたまは、雷神たけみかづち、即ち火の表現である。

☆以上により祖母山は「そふり」又は「そほ」と呼ばれて居たので、それに祖母の字を宛てたが為に色々な混同を生じたので姫が岳はこれとは関係はないのであるが、同じく祖母の字につれて混同せられたのである。

☆大蛇伝説は緒方三郎の術策に過ぎないことは明らかであるが、山の神との関係に就いては肥後和男氏は「山の神が人間の世界に働きかけるに際しては、何か特殊な形をとらなければならないし、その形の普通なものは蛇としての姿である」として、八岐大蛇即ち「ササノオ命」なりとし、其殺さねばならぬ理由を説いて居る。

☆「延宝の神明帳」によって見るも祖母岳大明神は明に山の神である。(略)豊後側の伝に石を祭りとあるのも神体が破却せられたから石を祭りたのではなくして、元來石を祭りたのが後に石祠を建てたものであり、阿蘇の霜祭の神体が石であることもこれと関連があるので、霜凝日子の神格を決定する一つの手掛かりであらふ。日向側の記録に神格がないのも本来山を祭りたので、豊玉姫と云ふのは後世に祖母山の文字に符会した説でなければならぬと思ふ。豊玉姫を山に祀りた例は他には無いと思ふ。火火出見命を祭りた社も高千穂郷内には外にないので、主として県南の海岸部に祀られて居り甚だ理解に苦しむのである。(略)それ等の解決を得る為には、八ヶ所の下宮並びに日向側の祖母祭祀の実際を調べる必要がある。

☆以上によりて推定すれば岩戸村と上野村とは信仰内容を異にして居たと云ふ事が考へられる(略)岩戸笹の戸附近から見れば真正面に屹立して居るは古祖母でありて障子岳之に連り祖母は見へない。下宮の外にも祖母神崎と云ふのが才田、黒原、中村、岩井谷にありこれ等も古祖母の尾を見ねばなるまい。従って岩戸の人々が始めに祭りたのは古祖母でありこれは地主神として山を祭りたので、それが後に祖母祭祀に統一せられた

と見るべきであらふ。

☆上野に就いて云へば関の方から望見せらるるのは親父山であり障子岳がこれに連りて居る。障子は精進であり山岳祭祀と関係あることは明らかであり、其尾が檜原で坊中の跡を堂屋敷と云い、其西の谷が黒原越で笈の町に出て其西の山が黒岳（玄武山）でこれも山岳祭祀の繋りのある地名である。

☆五ヶ所村はその祖先を肥後に発して居り、神原の下宮は五ヶ所村の総鎮守であるが、「日向地誌」には上宮を五ヶ所神社とし、これは明治十六年に添利山神社と改称した。下宮は神原神社と称した。これが五ヶ所村の鎮守であり後に五ヶ所神社（添利山神社）を此地に下し合祀して郷社祖母岳神社となりたのである。以上によりて推定せらるる通り神原神社は本来五ヶ所村の鎮守で、祖母岳大明神とは別の存在でありたが後に祖母神に統一せられて下宮と考えらるるやうになりたのであろう。

☆豊後では祖母山群を「うば」（生母）が嶽と考へたので、神かくしの里の所伝も生じ大蛇伝説とも発展して行ったのである。嫗岳明神は其姥ヶ岳の主神で当然山の神でなければならぬ。それが蛇を以て表現せられたのも自然であり、これを日向の神としたのは誤りである。日向側の山神は素戔鳴尊を以て表現せねばならぬのを、豊後側の伝説に巻き込まれて豊玉姫により統一されることになりたので、其主因は緒方氏の高千穂侵入に由来しその事は大賀七郎氏も認承して居られると思ふ。「おだまき伝説」と姥岳明神とは何等縁故はなかったのであるが、これを因縁づけたのは緒方三郎惟栄である。惟栄は緒方庄を預かる宇佐の弁宮でありたが一世の梟雄で、神宮に侵入し神領を横領、義経に依じて平家を九州より追出し一時九州全土に威を張りた。その軍威を誇らん為に嫗岳明神を利用したので「おだまき伝説」を借用して、自ら神孫と号し軍旗に嫗岳大明神の神号を用ひた。その一族が高千穂に侵入し三田井家の婿となり十社神主田尻氏をも嗣ひたので、高千穂の地は緒方勢力の下に置かれることになり祖母山に大蛇伝説が結合せらるるに至りたのである。

☆以上を要約すれば豊後側に於ける祖母祭祀は本来嫗嶽大明神でそれは地主神としての山神で蛇を以て表現せられて居た。（略）この蛇神信仰に附会して童神信仰となり豊玉姫となり祖母となりたのである。（略）霜凝社は嫗嶽とは関係のないもので「鬼八霜の宮」と同神であり阿蘇、高知保に関係ある社で「そほり」と合わせ考ふべき古社である。（略）緒方氏が姥岳大明神を祖神と考ゆるに及んでそれに併呑せられ霜凝日子神は煙滅したのである。然し緒方氏は式内の古社である霜凝の宮を表面に押立てて、其神孫と号したので嫗岳大明神霜の宮と云ふ結合が出来たのである。